3章

居心地のよい学級づくり

学校において、生活の基盤となるのが学級です。児童・生徒にとって居心地のよい学級とはどのような学級なのでしょうか。居心地のよい学級づくりのためには、何よりも自分の学級の実態を捉えることが必要です。

この章では、自分の学級が児童・生徒にとって居心地のよい学級なのかどうかを振り返るとともに、児童・生徒の実態把握の手立てやよりよい学級集団づくりに向けた具体的な手立てについて考えます。

１　自分の学級を見直してみよう

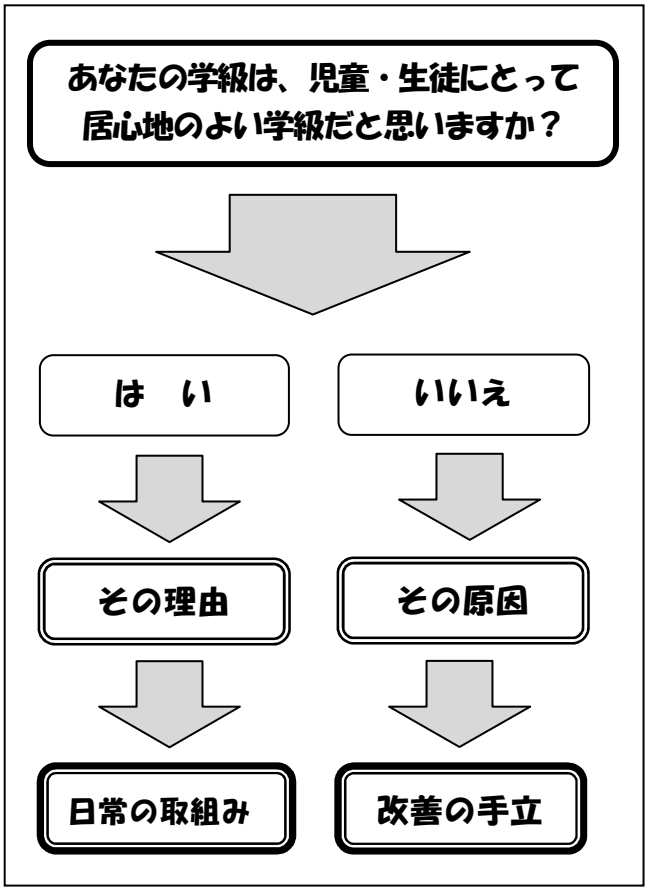
「自分の学級を、児童・生徒にとって居心地のよい学級にしたい」という願いは、教師ならば誰でも抱くことでしょう。では、児童・生徒にとって居心地のよい学級とはどのような学級でしょう。どのような状態ならば、児童・生徒が居心地がよいと感じるのでしょう。

例えば、「自分の言いたいことが自由に話せる学級」、「仲良しの友達がいる学級」、「先生がやさしく接してくれる学級」などが考えられます。

ほかにも様々なことが考えられますが、いずれにしても、児童・生徒が落ち着いた気持ちで過ごすことができたり、「また明日も行きたい」と思えたりするような学級であることが大切でしょう。

居心地のよい学級をつくるには、様々な手立てがあります。具体的な手立てについては、本章の２～４で紹介します。ここではまず、自分の学級（または自分が担当する学級）が児童・生徒にとって居心地のよい学級かどうかを見直してみましょう。

シート２　振り返りフローチャート



例えば左の図を参考に、居心地がよい理由や日常の取組み、居心地がよくない原因や改善の手立て等を具体的に考えてみてはどうでしょうか。こうした振り返りを意識的に行うことで、自分の学級が（または、自分の担当する学級が）、児童・生徒にとって居心地のよい学級かどうかが見えてきます。教師の取組みや、児童・生徒の行動によって、日々学級の状況は、変化します。自分の取組みを振り返り、学級を見直すことは、一度だけでは、不十分です。学期の始めや終わり、毎月の終わりなど、定期的に繰り返し行うことが大切なことです。

下のシート３は、東京学芸大学の小林正幸先生の著書『学校でしかできない不登校支援と未然防止』の中の「子どもの学校居心地感尺度」〔注７〕です。小林先生は、「これらの項目にすべての子どもが本心から『はい』と答える学級に不登校の子どもがいるはずがない」と言っています。さらに、「このような学級環境、学校環境でなければ、子どもは学習に意欲的に取り組むことはできないだろう」とも言っています。

自分の学級をこの「子どもの学校居心地感尺度」を参考に、「学校」の部分を「学級」と読み替えて見直してみましょう。見直す時には、自分の学級の子どもたちがどう感じているかということを思い浮かべながら判断することが大切です。また、必要であれば、児童･生徒に答えてもらうことも考えられます。

シート３　子どもの学校居心地感尺度

＊学校になじんでいる。
＊学校には自由に話せる雰囲気がある。
＊学校でゆったりしていられる。
＊学校で自分は幸せである。
＊学校で友達と助け合っている。
＊学校で居心地がよい。
＊学校で自分は認められている。
＊学校で楽にいられる。
＊学校で自分は受け入れられている。
＊学校で安心していられる。

（東洋館出版 2009 『学校でしかできない不登校支援と未然防止』　pp14-15）

YES？
or
NO？

この尺度がすべてではありませんが、ここに示したような視点で自分の学級を見つめ直してみることが、居心地のよい学級づくりへの意識を高めるとともに、不登校の未然防止につながる手立てだと言えるでしょう。また、児童・生徒によって感じ方も様々ですから、Ａさんは居心地がよいと感じていても、Ｂさんはそうではないということもあります。いずれにしても大切なことは、子どもの立場になって考えることです。

ここがポイント

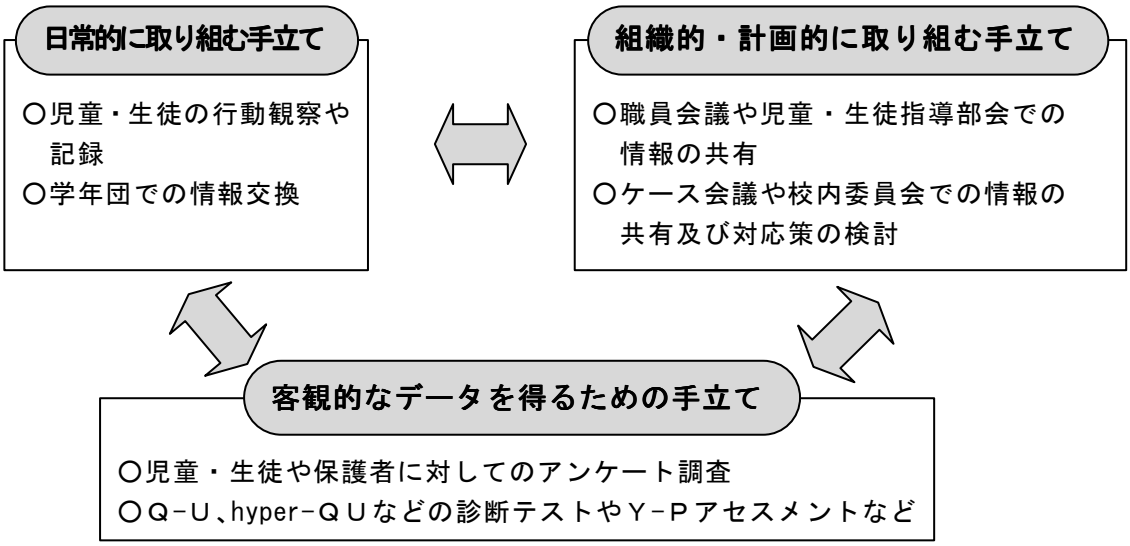
○学期の始めや終わり、毎月の終わりなど、定期的に振り返る
○児童・生徒の具体的な姿を思い浮かべながら、子どもの立場に立って見直す

〔注７〕東洋館出版 2009 『学校でしかできない不登校支援と未然防止』　pp14-15

２　児童・生徒の日常の様子の把握

児童・生徒にとって居心地のよい学級をつくるには、一人ひとりの気持ちをできるだけきめ細かく理解したり、児童・生徒同士の関係やグループ同士の関係などを的確につかんだりすることが大切です。そのためには、児童・生徒の実態を把握することが不可欠と言えるでしょう。

実態把握には様々な方法がありますが、それぞれの長所を生かし、学級の状況や知りたい情報等に合わせて使い分けることが重要です。



行動観察や情報交換は、すぐに取り組めることが一番の長所だと言えます。しかし、教師（観察者）の主観による判断に偏る傾向があるという短所があります。そこで、その短所を解消するには、複数の教師で児童・生徒を観察したり、授業だけでなく給食や清掃活動、特別活動や部活動など、日常生活の様々な場面での情報を集めて、多面的に判断したりするなどの配慮が必要です。そこで得られた情報を、各種会議で有効に活用し、情報の共有化を図ることが、きめ細やかな実態把握につながります。そうすることにより、具体的な対応策を見いだすことができます。

アンケート調査や各種診断テストは、調査結果を分析したり、設定された判断基準に基づいて判断したりするので、ある程度の客観性を得ることができる点が長所です。しかし、準備や集計・分析に時間や手間が掛かることや、費用を要することが短所として挙げられるでしょう。

実態把握に当たっては、それぞれの手立ての特徴を理解し、目的を明確にして取り組むことや、把握した内容を活用する見通しを持って実施することが大切です。また、複数の手立てを組み合わせることも、きめ細やかな実態把握には有効と言えます。

実態把握の具体的な手立ての例

【行動観察・記録】

右の表は、Ｅ小学校で活用している、「子ども理解チェックシート」の一部です。チェック項目の内容は、「学習」、「生活」、「行動」、「登校」、「身体」、「家庭」、「特記事項」等に分かれており、さらにいくつかのチェック項目が設定されています。このチェックシートは、児童の困り感を適切に捉え、指導に生かすことを目的としています。こうしたシートを活用して、継続して記録することも、児童・生徒理解に有効です。

取扱い注意

年　組　担任　　記入者

		学習							生活			行			
それぞれの項目について あてはまる→○ 該当しない→空欄	年間三十日以上の欠席経験	学力不振・基礎学力不足	書くことに困難	読みに困難	計算に困難	文章問題に困難	意欲がない	発音不明瞭	吃音	忘れ物が多い	宿題を忘れる	学習準備ができない	整理整頓ができない	だらず落着きがない	多動・離席が多い	乱暴な行動が多い
1																
2																
3																
4																
5																
6																
7																
8																
9																

第 13 図　子ども理解チェックシート

【Ｑ-Ｕとは・・・】〔注８〕

「Q-U」は、学級全体と児童・生徒個々の状況を把握するための、二つの診断尺度である「学級満足度尺度」及び、「学校生活意欲尺度」と、それぞれに対応する「居心地のよいクラスにするためのアンケート」と「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」の二つの心理テストから構成されており、それらの分析結果から児童・生徒一人ひとりについて理解するとともに、学級集団の状態の把握とその後の学級経営の方針を立てることができます。

さらに、「hyper-QU」は、「Q-U」の２つの診断尺度に「ソーシャルスキル尺度」を加え、「集団形成に必要な対人関係を営むために必要なスキルが、児童生徒にどの程度身についているか」も含めて診断するものです。

【Ｙ-Ｐアセスメントとは・・・】〔注９〕

横浜市が策定した「子どもの社会的スキル横浜プログラム」は、子どもたちの年齢相応の社会的スキルを育成することを目的とした「指導プログラム」と、学級や個人の社会的スキルの育成の状況を把握し、改善の方法を探る「Y-Pアセスメント」から構成されています。

「Y-Pアセスメント」は、複数の教師による「学級風土チェックシート」と、子どもが回答する「学校生活についてのアンケート」の結果によってアセスメントを行うものです。

ここがポイント

○手立ての特徴を理解し、目的を明確にする
○継続的に実施し、児童・生徒の変容を見取り、実践に生かす
○児童・生徒は日々変容する。調査結果が全てではない

【第 13 図】子ども理解チェックシートは、53 ページ参照
〔注８〕Questionnaire-Utilities の略。図書文化社発行
〔注９〕横浜市教育委員会「子どもの社会的スキル横浜プログラム」

３　学級集団づくりのキーワード

学級には、多様な児童・生徒が存在し、様々な人間関係があります。学校生活の基盤である学級において、好ましい人間関係やよりよい集団をつくるためには、教師が「目指す学級像」を明確に持ち、適切な指導を行わなければなりません。

ここでは、不登校の未然防止につながる、よりよい学級集団づくりに向けて、児童・生徒に意識させたいことや教師の役割等について考えます。

よりよい学級集団をつくるためには、自分が受け入れられていることや、必要とされていることを感じることができるような、あたたかい雰囲気が必要です。つまり、一人ひとりが自己有用感を実感できることが大切だということです。

そのためには、児童・生徒に、お互いの立場を尊重し認め合うことを意識させなければなりません。また、時には児童・生徒の問題行動に対して、毅然とした態度で指導するといった、規律ある雰囲気も必要です。児童・生徒一人ひとりにあたたかく優しい態度で接するとともに、教育的愛情を持って、健全な成長を促す指導をすることが教師には求められます。

あたたかい雰囲気づくり

〇相手の立場になって考える。
〇お互いの考えを認め合える。
〇お互いのよさを見付けようとする。
〇自分の思いや考えを素直に言える。
〇活躍の場がある。　　など

規律ある雰囲気づくり

〇わがままな態度を注意する。
〇児童・生徒同士のトラブルに対処する。
〇規則に公然と違反する行為は認めない。
〇いじめや暴力行為は許さない。
　　など

自分の居場所がある・安心して過ごせる学級

ここに示した内容は、授業はもとより休み時間や給食、清掃、特別活動など、学校生活全般で行われなければなりません。様々な機会を生かして取り組むことは、一人ひとりの個性に対応することになります。

そうすることにより、児童・生徒は、「先生は自分たちのことを気にかけてくれている」、「いつも見ていてくれる」、「困ったときは守ってくれる」と安心感を持つようになります。そうした気持ちを児童・生徒に抱かせることができる学級をつくることが、不登校の未然防止につながるのです。

平成 23 年度に総合教育センターで不登校対策の内容を扱った研修講座の受講者のアンケートの記述内容から、学級集団づくりにおいて教師が意識したいことにつながるものを紹介します。

○どうして多くの子どもが登校するのかということを理解することが大切だと感じた。毎日元気に登校してくれる子どもたちの頑張りに目が向く気がした。
○学級の雰囲気づくりが不可欠であり、教師対子どもだけでなく、子ども同士のコミュニケーションが活発に行われるような学級経営にしていきたい。
○不登校の未然防止には、学級経営における支持的風土づくり、認め合える人間関係づくり、居場所、所属感を高めるといった方策が有効であることを改めて確認できた。
○「学校が楽しい場所」なら不登校になりにくいと考える。家庭に経済的困難があっても学校が子どもにとって魅力のある場所であれば登校して笑顔を見せてくれる。
○学級の雰囲気づくりが大切だと思った。誰かが欠席したら「どうしたんだろう」と心配するようなクラスにしたい。それは担任の働きかけが大切だと思う。

コラムＢ　東海大学　芳川玲子教授からのメッセージ

教員であれば、いろいろな雰囲気の学級が存在することを知っているであろう。元気な学級、騒々しいが運動会になるとまとまる学級、友人に優しい学級などなど。その学級が醸し出している雰囲気を学級風土(Classroom climate)と言う。国語辞典によれば、風土とは「土地の状態、季候、地勢などのあり様」、もしくは「人間の文化の形成に影響を及ぼす精神的な環境」（大辞泉）を指す用語である。学術的に定義すると、学級風土とは「学級を構成する物理的側面や組織的側面及び人的側面から規定される学級の『性格』」(Moos,1974)である。

不登校との関連で言えば、学級風土と児童・生徒の性格的な相性が合わない場合、学級への入りにくさやとけ込みにくさが生じる。また、学級風土に関連する要素として、学校行事、教師との関係、学級内の人間関係などがあり、風土を変えることによって学級集団そのものが変化することも明らかになりつつある。

したがって、「親しさ」、「公平さ」、「自由度」、「思いやり」、「規律正しさ」、「満足度」など、学級風土に影響を及ぼす要因に視点を当て、学級内の様子を捉えていくことが、お互いを受容し合える、あたたかな学級風土をつくることになる。

ここがポイント

○あたたかい雰囲気と規律ある雰囲気のバランスが大切
○学校生活のあらゆる場面を生かして、児童・生徒の居場所や活躍できる場をつくることが居心地のよさにつながる

４　学級集団づくりの具体的な取組み

児童・生徒の実態を把握し、目指す学級像が明確になれば、次は実践です。ここでは、多様な手立ての中からいくつかの実践事例を紹介します。

（１）チームで育てる人間関係づくり

厚木市　Ｅ小学校
学校の規模
○大規模校
学校の課題
○家庭状況の多様化に伴い、児童指導上の課題が顕在化した。
○数年前は不登校児童が、30名以上いた。

厚木市立Ｅ小学校では、学校が抱える課題解決に向けて、全職員で“チームで子どもたちを育てる”意識を高め、保護者とともに児童指導の充実に努めてきました。その手立ての一つとして、「児童指導の手引き」を作成し、全職員の共通理解の下、具体的な手順や配慮事項、留意点を記載し、児童指導の一層の向上を図ってきました。

それは、全教職員が統一した指導を行うことで「ぶれ」をなくし、よりよい学校生活を築き、児童にとって居心地のよい学級集団づくりをしたいという教師の願いがあったからです。ここでは、Ｅ小学校が全学級で取り組んでいる、チェックリストの一部を紹介します。

◆実践内容の紹介◆

学級開きチェックリスト（チェック項目は一部）〔注 10〕

○子ども達を具体的にほめた。（10 回以上）
○このクラス・先生は楽しい！と印象づけた。
○「いじめは絶対に許さない」と宣言した。
○「いじめられたら先生が守ります」と宣言した。
○教室に入るとき、明るく大きな声で挨拶をした。
○全員の名前を呼び、目を合わせた。
○黒板の字が見えにくい子へ、座席の配慮をした。
○欠席の子どもへ連絡を入れた。
○教科書などを配るときに、「どうぞ」「ありがとう」などで配るように指導した
○子ども達が下校後、下駄箱の靴の様子を確認した。

第一印象が肝心！

《期待される効果》
＊新しい担任や学級に対する不安が軽減される。
＊自分が守ってもらえるという安心感を与えられる。
＊一人ひとりを大切にしたいという教師の思いや願いが伝わる。

２学期・３学期のスタート！チェックリスト（チェック項目は一部）〔注 11〕

前まで

〇クラス名簿を確認する。
（転入生、子どもの名前を思い出す）
〇教室の掃除、整理・整頓をする。
（色あせた掲示物ははずす）
〇黒板に、予定とメッセージを書く。

初日

〇教室に入るとき、明るく大きな声（＋笑顔）で挨拶をする。※
〇健康観察で一人一人と目を合わせ、「ハイッ」と短く返事をした子をほめる。※
〇短い時間でも楽しいゲームを行う。

９月中・１月中

〇※の内容は、しばらくの間継続する。
〇明確な朝自習の課題を出す。

準備をしっかり

明るい雰囲気づくり

継続した指導

《期待される効果》

＊気持ちよく児童を迎える。
＊長期休業で離れていた児童との心の距離を縮める。
＊新学期の見通しを持たせ、目標を明確にさせる。
＊学校生活のリズムを取り戻させる。

この取組みで注目したいことは、具体的な教師の行動が明確に示されていることです。このように児童一人ひとりを大切にした、教師のきめ細やかな接し方が、居心地のよい学級づくりには必要です。また、全学級で継続して実施しているところも参考にしたい点です。居心地のよい学級は、一部の教師の短期間の取組みでつくられるものではありません。全校一斉の長期的な取組みによって、Ｅ小学校で目指している「ぶれ」のない指導を徹底することができると言えます。

◇取組みの成果◇

〇多くの児童から「学校が楽しい」という声が聞かれるようになった。
〇３年間の取組みで、不登校がほぼ解消された。

Ｅ小学校では、45ページで紹介した「子ども理解チェックシート」やQ-U、Y-Pアセスメントでの実態把握も行っています。児童の実態を踏まえ、児童の立場に立って、新学期のスタートを居心地のよい雰囲気にするように努めたことが、不登校児童の解消につながったといえるでしょう。

〔注 10〕〔注 11〕の関連資料は、54 ページ参照。

４　学級集団づくりの具体的な取組み

（２）　班編成を活用した人間関係づくり

小田原市　Ｈ中学校

学校の規模

〇生徒数：約 240 名、学級数：10 学級（うち特別支援学級数：２学級）

学校の課題

〇人間関係づくりが苦手な生徒が少なくない状況がある。

〇平成 22 年度の不登校生徒の割合が６％。

小田原市のＨ中学校では、学校が抱える課題解決に向けて、人間関係を視野に入れた授業づくりや学年・学級づくりに取り組んできました。

校内研究組織に「集団づくり部会」を位置付け、人間関係づくりや誰もが居場所のある集団づくりを目指してきました。ここでは、全学年共通の班編成による取組みを紹介します。

◆実践内容の紹介◆

全学年共通の班編成（前期）　⇨　班活動　⇨　生徒・教師の評価　⇨　後期班編成

《共通項目》

〇男女混合の６班編成

〇給食・掃除当番を班単位で

《配慮事項》

〇人間関係への配慮

〇教え合いができる学習環境

《活動場面》

〇教科学習

〇給食

〇清掃

〇学校行事

《実施後の取組み》

〇前期終了時に学級や班に対する評価結果をもとに、成果や課題を話し合う。

〇話合いの内容を、後期第２次班編成に生かす。

この班編成は、人間関係づくりが苦手な生徒にとっては、半年間を掛けてじっくりと仲間づくりができるというよさがあります。また、学校生活の様々な場面で班員同士が関わることにより、徐々にお互いを理解し合いながら、友達との関わり方を学んでいくことが期待できます。

◇取組みの成果◇

〇自分の意見や考えを、自由に言い合える雰囲気ができてきた。

〇教科学習や学校行事において、生徒同士の学び合いが見られるようになった。

班活動を通して生徒は、自分の居場所や一緒に活動してくれる友達の存在を実感し、活発に活動するようになりました。生徒の活動の母体である班編成を工夫し、居心地のよい班づくりに取り組んだことが、学級や学年の居心地のよさにつながったといえるでしょう。

（３）　レクリエーションやゲームで人間関係づくり

学級や学校が居心地のよいものであるためには、児童・生徒同士や教師と児童・生徒との信頼関係が大切です。ここでは、居心地のよい集団にしていくための手立てとして、レクリエーションやイニシアティブ〔注 12〕などの活動について考えます。これらの活動は、ある一定のルールや条件のもとで、参加者同士が話したり、一緒に考えたり、行動したりしながら、人と関わることの心地よさや規範意識、意思決定能力や問題解決能力等を身に付けることが期待できます。

活動の効用

○知らない人同士、あまり会話をしていない人同士でも一緒に活動できる。
○集団で活動する心地よさを感じさせることができる。
○その場の雰囲気を盛り上げることができる。
○ルールの大切さを自覚させる。
○社会性、問題解決能力、リーダー性、チームワーク等の育成につながる。
○係分担をすることで、全員が活躍する場を設定する。
○班活動、学級活動の活性化につながる。　　など

レクリエーションやイニシアティブなどの活動には、多くの効用が期待できますが、ただ単に活動するだけでは、十分な効用を得ることはできません。活動を選択するにあたっては、次のような点に配慮することが大切です。

活動を選択する際の配慮事項

○児童・生徒のお互いの関係性（親密度）を踏まえる。
（ほとんど知らない・ある程度知っている・よく知っている）
○児童・生徒の人数に合わせた活動を選択する。
○活動する時期を考慮する。（学年始め・席替えの後・行事の前など）
○活動することにより期待される効果を理解し、目的に合わせて選択する。
　　など

活動した後は、「楽しかった」、「面白かった」だけで終わるのではなく、参加者が活動を通してどのようなことを感じ、学んだのかを、お互いに振り返る時間を設けることが重要です。お互いの感想や意見を交換することで、様々な感じ方や考え方があることを知ることができます。そして、そのことが相互理解を深め、お互いを尊重する意識を高めることにもつながります。

〔注 12〕知恵とアイディアで問題解決をしていくタイプの活動。グループ全員で挑戦する。
（学事出版 1998 『今こそ学校にアドベンチャー教育を「心の教育」実践プログラム』 p 140）

レクリエーション・イニシアティブなどの活動例　〔注 13〕

親密度	ゲームの内容	期待される効果
低	**あとだしじゃんけん** ○リーダーの指示で、じゃんけんのあとだしをする。 ○最初はリーダーに勝つように出す。何度か繰り返したあと、リーダーにわざと負けるように出してみる。	○失敗を楽しむことでメンバー同士の緊張感がほぐれる。 ○みんなが同じ失敗をすることで、会話のきっかけができる。
ほとんど知らない	**偏愛マップ** ○自分の好きなものを思いつくまま書く。（２分程度） 例：好きな店・芸能人・スポーツ・テレビ番組など ○隣の人（知らない人がいい）と交換し、共通点を見つけたり興味あることを聞いたりして話合う。	○「仲間がいた！」という発見。 ○友達と好きな話ができる。 ○嫌いな人がいなくなる。 ○お互いの好みを知ることが、認め合いにつながる。
ある程度知っている	**インパルス** 全員で輪になり手をつなぐ。最初の人を決め、その人は、左手をギュッと握る。握られた人はすぐに左手を握り、「ギュッ信号」を順番に送る。早く回せるかというゲーム。手をつなぐのが難しければ、隣の人の手にタッチする等でもよい。	○恥ずかしいことや不安なことに対しての抵抗感が軽減される。 ○目標が達成できると、一体感が生まれる。
よく知っている	**教科学習編** ○各教科の復習をグループごとに話合い、より多くの答えを導き出していく。（基本的に班対抗） 国語例：にんべんがついている漢字をできるだけ書く。 英語例：Ａで始まる英単語をできるだけ書く。 社会例：東北地方に属する県とそれぞれの特産物、名所等をできるだけ書く。	○グループ内の話合いによりコミュニケーションづくりができる。 ○まとめ役や得意分野を担当する者など、役割分担による協力体制が生まれる。
	ルックダウン・ルックアップ・キャッチ ○肩がふれあうくらい輪を小さくする。「ルックダウン」で全員下を向き、「ルックアップ」で上を向き、「キャッチ」の合図で自分の決めた人の目を見る。目と目が合ったら、お互い握手して輪の外にでる。	○言葉を交わさずに自分が見る人を決めることを通して、選択の自由を感じたり意思決定能力を高めたりすることができる。
高	**ハウマッチ** ○チラシや広告を使って、商品の価格をグループで相談して答えを予想していく。（基本的に班対抗）	○グループ内の話合いによりコミュニケーションづくりができる。

活動する中で参加者は、みんなで一緒に活動できたことに心地よさを感じます。イニシアチブゲームには「参加したくなければ、見ているだけでもよい」というルールがありますが、活動を進めるにつれて、参加者には、「見ている人とも一緒に活動したい」という気持ちになる場合があります。このような気持ちは、教室に入れなかったり登校できなかったりする友達とも、一緒に生活を送りたいという気持ちと同じだと考えられます。

ここに紹介したゲームを通して、児童・生徒に友達のことを考えたり思ったりする気持ちを育むことが、居心地のよい学級づくりにつながります。

〔注 13〕参考資料　杏林書院 2001 『手軽で楽しい体験教育　よく効くふれあいゲーム 119』・NTT 出版 2004 『偏愛マップ』・学事出版 2005 『クラスの人間関係がぐ～んとよくなる楽しい活動集』・杏林書院 2005 『みんなのＰＡゲーム 243』

資料１

取扱い注意

子ども理解チェックシート

年　組　担任　　記入者　　調査年月日　年　月　日

それぞれの項目について
あてはまる→○
該当しない→空欄

		年間三十日以上の欠席経験	学習								生活			行動									登校			身体					家庭					特記事項	支援状況			ケース会
			学力不振・基礎学力不足	書くことに困難	読みに困難	計算に困難	文章問題に困難	意欲がない	発音不明瞭	吃音	忘れ物が多い	宿題を忘れる	学習準備ができない	整理整頓ができない	たえず落着きがない	多動・離席が多い	乱暴な行動が多い	ルールが守れない	感情に波がある	人間関係が苦手	友達とのトラブル多い	緘黙傾向	欠席が多い	遅刻・早退が多い	登校しぶり	身体的持病がある	食物アレルギー	保健室によく行く	けがが多い	排便・排尿・夜尿	家庭環境・生活	外国籍	要保護・準要保護	母子・父子	その他		1学期	2学期	3学期	
1																																								
2																																								
3																																								
4																																								
5																																								
6																																								
7																																								
8																																								
9																																								
10																																								
11																																								
12																																								
13																																								
14																																								
15																																								
16																																								
17																																								
18																																								
19																																								
20																																								
21																																								
22																																								
23																																								
24																																								
25																																								
26																																								
27																																								
28																																								
29																																								
30																																								
31																																								
32																																								
33																																								
34																																								
35																																								
36																																								
37																																								
38																																								
39																																								
40																																								

資料２

学級開き　チェックリスト

	項目	チェック
1	子ども達を具体的にほめた（10回以上）	
2	このクラス・この先生は楽しい！と印象づけた	
3	「いじめは絶対に許さない」と宣言した	
4	「いじめられたら先生が守ります」と宣言した	
5	今までいじめたことがある子を立たせ、素直に立てたことをほめた	
6	担任としての一年間の方針を話した（叱る三原則など）	
7	教室に入るとき、明るく大きな声で挨拶をした	
8	机を離している子どもがいないか確認した	
9	担任が話をしている時に、全員が担任の方を向いているかどうかを確認した	
10	全員の名前を呼び、目を合わせた	
11	すぐにできるゲームをし、楽しい雰囲気を作った	
12	子ども達の下駄箱の場所を確認した	
13	子ども達のロッカーの場所を確認した	
14	黒板の字が見えにくい子へ、座席の配慮をした	
15	欠席の子どもへ連絡を入れた	
16	自分の身なりを整えた	
17	鏡の前で笑顔をチェックした	
18	朝、子ども達に会う前に出会いの挨拶を練習した	
19	笑顔で子ども達に挨拶をした	
20	子ども達へ握手などのスキンシップを図った	
21	教科書などを配るときに、「どうぞ」「ありがとう」などで配るように指導した	
22	教科書や持ち物に名前を書くように言った	
23	全員の名前を呼んだとき、「ハイッ」と短く返事した子をほめた	
24	席を立つ時には、椅子を入れて立つことを指導した	
25	全員が連絡帳を丁寧に書いているかを確認した	
26	下校前に「教室をきれいにします。ゴミを3個拾いなさい」と言った	
27	じゃんけんで勝った子から帰るなど、楽しい帰り方を実行した	
28	子ども達が下校後、下駄箱の靴の様子を確認した	

資料３　※３学期も内容は同様

２学期のスタート！　チェックリスト

	項目	チェック
前まで	クラス名簿を確認する。（転入生、子どもの名前を思い出す）	
前まで	教室の掃除、整理・整頓をする。（色あせた掲示物ははずす）	
前まで	教室近くの水道をしばらく出しっぱなしにする。	
前まで	ごみ箱をきれいにする。	
前まで	初日の授業の準備をする。	
前まで	初日にするゲームの準備をする。	
前まで	席替えの構想を立て、準備する。	
前まで	黒板に、予定とメッセージを書く。	
前まで	掃除当番の確認をする。	
前まで	自分の身なりを整える。	
前まで	鏡の前で笑顔をチェックする。	
初日	教室に入るとき、明るく大きな声（＋笑顔）で挨拶をする。※	
初日	机を離している子どもがいないか確認する。※	
初日	担任が話をしている時に、担任の方を向いているかどうかを確認する。※	
初日	健康観察で一人一人と目を合わせ、「ハイッ」と短く返事をした子をほめる。※	
初日	子ども達へ握手などのスキンシップを図る。	
初日	教科書などを配るときに、「どうぞ」「ありがとう」などで配るように指導する。※	
初日	全員が連絡帳を丁寧に書いているかを確認する。※	
初日	提出物の出し方、未提出の子どもへの指導をする。	
初日	席を立つ時には、椅子を入れて立つことを指導する。	
初日	運動会の歌「　　」を一回は歌う。※	
初日	私（担任）の夏休みの思い出を話す。（できたこと、反省点、読んだ本）	
初日	上履き、名札等の身なりの乱れはないか確認する。※	
初日	短い時間でも楽しいゲームを行う。	
初日	運動会への意欲を持たせる。（イメージが膨らむ話をする）	
9月	※の内容は、しばらくの間継続する。	
9月	給食のルール再徹底（おかわり・配膳時間の待ち方・片づけ方は特に入念に）	
9月	明確な朝自習の課題を出す。	
9月	宿題は量は少な目でも、毎日課題を与え、チェックをする。	

4章

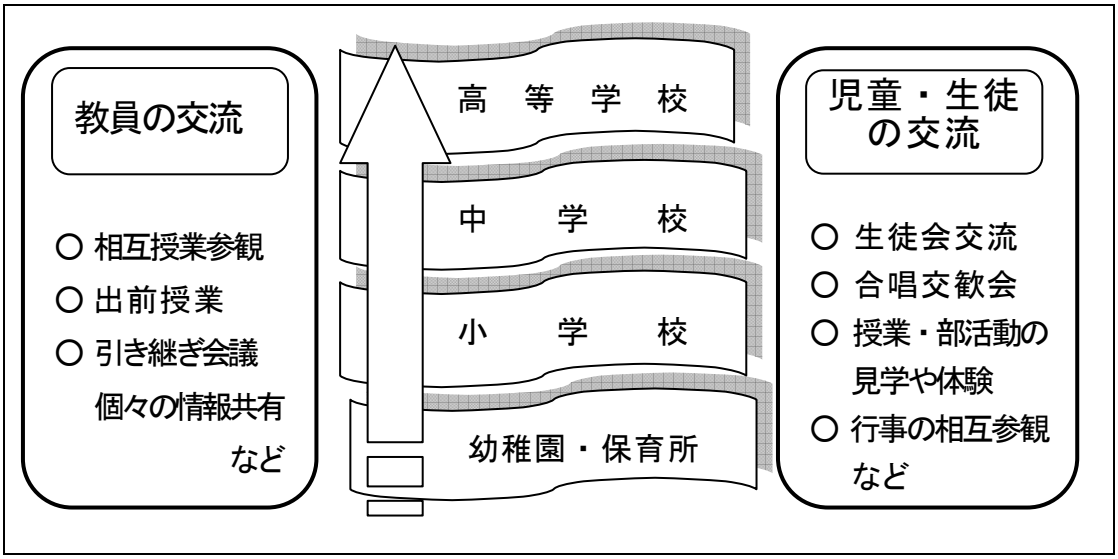
小中連携・中高連携の推進

不登校になった原因・きっかけに大きく関係することとして、１章で述べた「中１ギャップ」など、上級学校への進学時の不適応があります。この課題解決のためには、学校が連携して上級学校へのスムーズな移行につながる様々な取組みを行っていくことが必要です。

この章では、不登校の未然防止につながる学校種間連携の具体的な取組みを紹介します。実践例は小中連携が中心ですが、高等学校や特別支援学校にも通じる点があると考えます。

１　学校種間連携の現状と課題

学校種間連携は、児童・生徒の進学時の不適応を解消し、上級学校へのスムーズな移行を可能にするために重要です。多くの学校では、幼保・小、小・中、中・高において、連携の必要性を認識し、下図のようにそれぞれの学校で教員の交流や児童・生徒の様々な交流が行われています。



第 14 図　幼保・小・中・高連携の方法例

しかし、１章で述べたように、中学校１年生で不登校生徒が急増する「中1ギャップ」という現象に代表される課題があり、残念ながら不登校は思うように減っていない事実があります。この課題解決のためには、９年間のつながりを意識し、お互いの取組みをより知ることが求められます。

また、高等学校では、「不登校になった原因・きっかけ」に「入学、転編入学、進級時の不適応」がありました。（→８ページ参照）高等学校においても、新たな不登校を生まないために、6年間を視野に入れた、中学校との連携が必要になります。

各学校が、現在取り組んでいる連携のあり方を見直し、不登校の未然防止につながる学校種間連携とはどういうものなのか、具体的な実践事例を見て考えていきましょう。

この章の2節で紹介している具体的な実践例は、次のとおりです。
具体的な取組みについては、主な項目を掲載しています。

【具体的な取組み１】

○校種の違いによる壁を取り除くために

小中連絡会
小中合同研修会
児童・生徒指導面の連携

Ｆ中学校区の取組み

58～61 ページ参照

【具体的な取組み２】

○学習指導方法や学習形態をつなぐ

「学習の約束」の徹底
「家庭学習時間」の意識付け
幼保小中一体教育研究会

Ｈ中学校区の取組み

62～63 ページ参照

【具体的な取組み３】

○小中連携シートの活用
～行政・専門家との連携～

取組みの経緯
「小中連携シート」のねらい
「小中連携シート」の活用と効果

南足柄市の取組み

64～66 ページ参照

【具体的な取組み４】

○中高連携の在り方
～支援シートの活用～

生徒本人・保護者の思いを高等学校の教員につなげる

神奈川県教育委員会の取組み

67～68 ページ参照

２　具体的な取組み～中１ギャップ解消を中心に～

（１）　校種の違いによる壁を取り除くために

～厚木市立Ｆ中学校区の実践～

Ｆ中学校区（１中学校・２小学校）では、市教育委員会から、平成20・21年度の２年間「効果的な小中連携教育の在り方」の研究指定を受け、次のような課題意識を持って研究を推進してきました。

小学校と中学校は「学校文化が違う」と言われます。それは対象となる児童や生徒の発達課題等の違いや指導する側の課題意識の差が背景にあると考えます。校種の違いによる、教職員の苦労をお互いが理解していないことも背景にあり、その解決策として小・中の人の交流が何より大切と考えていました。現実は一歩踏み込むといろいろな壁があります。この壁を少しずつ教職員みんなの努力で取り除くと想像だにしなかった新しい世界が開けてきます。

（「Ｆ地区における９年間を見据えた効果的な小中連携について」冊子より抜粋）

校種の違いによる壁を取り除くために、Ｆ中学校区では、小学校と中学校の人の交流が大切と考え、次のような取組みを行ってきました。

【小学校・中学校の教師の願い】
○教職員の苦労をお互いに理解しよう
○お互いの教育活動を理解しよう

小中連絡会
教員同士の連携を深める

小中合同研修会
教師力を高める

児童・生徒指導面の連携
より深く・広い児童生徒理解

【Ｆ中学校教員の声】
ひとえに「生徒理解」が大切です。不登校対策という視点だけでなく、生徒との信頼関係づくりを重視しています。小中連携に関しては、９年間で子どもたちを育むという、思い・意識・基準・行動の共有を大切にしています。

ア．小中連絡会

Ｆ中学校区では、次のように授業参観や情報交換など小中連絡会を年３回実施しています。

第1回 ５月	６年次担任を中学校に招き入学後一ヶ月を経た生徒達の姿を参観・情報交換 ⇩ 入学後の変化に対する６年次担任の気付きは、中学校職員には大変貴重である。
第2回 10 月	中学校教員が小学校の授業を参観し、その後意見交換会 （生徒指導、学習指導、児童・生徒会活動の分科会協議） ⇩ 小学校の授業、児童の様子を参観することで、一つ一つのきめ細かい指導の積み重ねの上に、中学校の子どもたちの姿があることを実感し新鮮な思いを抱く。
第3回 ３月	入学後１年経った子ども達の姿を小学校教員が参観 Q-U 結果も参考資料とした来年度入学生徒の引き継ぎ ⇩ Q-U 結果での所属群を情報共有、小学校時に不満足群だった児童に対する丁寧な情報交換 、要配慮の申し送り・支援体制を準備して受け入れることができる。

連携 の 成果	☆小学校時代に効果的だった関わり方、子どもが理解しやすい言葉や表現方法などを教わることで、一貫した視線で指導を積み重ねることができた。 ☆現場で感じるギャップなどを意見交換会で出し合い、よりよい指導体制を各学校で高め合うきっかけとなった。

小学校・中学校の教員が、連絡会を通して、互いの授業や子ども達の様子を把握するなど、小中それぞれの取組みの理解に努めています。９年間を一つの連続した指導の視点で成長できるように、また、教員の力量向上のための連携の場として有効な連絡会となっています。このような連携による取組みが、中１ギャップ解消につながっています。

イ．小中合同研修会

Ｆ中学校区では、教師力を高めるために、児童・生徒理解を深めるために、学区の全教員が参加し、８月に小中合同研修会を開催しています。これまで研修会では、アドラー心理学の内容を扱った危機管理研修や学級経営研修などが行われてきました。ここでは、講師を招いて行われた Q-U に関する合同研修会について、その研修内容と参加された教員の声を紹介します。
（※Q-U は、市で予算措置をして実施されたものです。）

＜小学校教員（小６担当）の声＞

小６と中１両方の Q-U のプロット図を資料として、より深く個人や集団の分析を行うことができた。

プロット図から見えてくる課題についても全員で話し合うことができ、その後の指導へのヒントを得ることができた。

＜研修内容＞
小学校旧６年担任と中学校１年担任で Q-U データをもとに、
〇小中が連携し、効果的な児童・生徒指導や集団作りについて研修する。
〇個別の支援方針検討の会議を行う。

データを継続的に見ることで、単年では気が付きにくいことでも眼がいくようになり、生徒理解がより広く丁寧にできると思った。

小学校の先生から話を聞き、さらに生徒理解を深めるための情報交換になった。そのきっかけとしてプロット図があったことは有効であった。

＜中学校教員（中１担当）の声＞

連携の成果	☆Q-U 結果を小中両方で活用することにより、同じ尺度で結果が出てくるので、情報交換の観点が共通になり、より深い話し合いができ、「思い」を共有できた。

Q-U 結果から、中学校との連携、中１ギャップなどを意識した学年集団への指導も重視するようになり、学年全体の集団づくりを大切にして指導を進めるようになりました。

このように合同研修会という場は、小中が連携し、９年間で子どもを育む意識を共有する有意義な機会となります。

ウ．児童・生徒指導面の連携

Ｆ中学校区では、数年前、当時小学校６年生の授業妨害等問題行動が出現したことがきっかけで、児童・生徒指導担当者が年２回（夏休みと冬休みの始め）情報交換を行ってきました。児童・生徒指導面の連携の重要性についてＦ中学校区の取組みから考えていきましょう。

小学校６年生の授業妨害・暴力行為・
暴言等問題行動が出現

困惑・・	今まであまりなかったことで、どうすればいいのかわからない。 中学校ではどう対処しているのだろう？　中学校から学ぼう！
連携の必要性	○９年間を見据えた積極的な児童・生徒指導 ○小中の指導の中で、「ブレ」・「ズレ」を少なく
具体的な取組み	○指導体制・方法に関すること 中学校側が、問題行動に対する基本的スタンスや指導体制を示し、活用してもらう。 →「問題行動指導に関する基本的指針及び心構え」 →「小学校高学年から中学校入学を見越して重視して欲しい生徒指導の観点」 →「小学校で、児童指導をチーム体制で進めるために」 ○実際に行動を共にすること →合同パトロール・連絡会・研修会
連携の成果	☆小・中学校、それぞれが工夫して取り組むところが確認できた。 小：担任１人の価値観ではなく「チーム」での価値観を持つ。 中：小学校で最上級生だった自尊心をつぶさずに中学校での最下級生として活かしていく。

このような連携に取り組んできたことで、小学校教員の問題行動指導への意識が向上し、中学校教員も小学校の取組みに理解を深めることができました。そして、Ｆ中学校は、不登校生徒数が平成19年度20名以上でしたが、平成22年度８名と激減しました。また、平成21～22年度にかけて新たな不登校が減っています。

２　具体的な取組み～中１ギャップ解消を中心に～

（２）学習指導方法や学習形態をつなぐ

～小田原市立Ｈ中学校区の実践～

２章でも述べたように、不登校の未然防止には「わかる喜びのある授業」が重要です。この「わかる喜びのある授業」をつくっていくためには、小学校と中学校が連携し、学習方法や学習形態をつないでいく必要があります。

Ｈ中学校区（１中学校・２小学校）では、学習が進むにつれ理解が不十分になる傾向があり、また、人間関係づくりを苦手とし、自己有用感の低い児童・生徒が見られました。そこで、Ｈ中学校区は、平成22・23年度の2年間「魅力ある学校づくり調査研究事業」の指定を受け、不登校を含む集団への不適応を防ぐために、よりよい集団づくり、人間関係づくりを目指した学年・学級づくりを視野に入れた、授業改善を推進してきました。

「魅力ある学校づくり調査研究事業」
国立教育政策研究所では、不登校の未然防止を推進するため、都道府県教育委員会と連携し、児童生徒の豊かな人間性や自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育成する「魅力ある学校づくり」について調査研究事業を実施し、各地域におけるすぐれた取組みを広く全国の学校や教育委員会に周知する。
（『魅力ある学校づくり調査研究事業実施要項　１趣旨」一部抜粋）

授業改善の推進の一つの柱として、小中連携による９年間を見通した学習指導の体制づくりがあります。Ｈ中学校区の３校では、共通理解の下、以下のような３校共通の取組みを始めました。その具体的な取組みと成果を紹介します。

「学習の約束」の徹底 ※各教室掲示	○時間前に着席する。 ○話を最後までしっかり聞く。 ○忘れ物をしない。（提出物の期限を守る）
「家庭学習時間」の意識付け	○「学年×10分」を家庭学習の時間として小学校１年から取り組む。（例：中学３年生は９×10分で90分となる） ○中学校では、定期テスト前の16日間を強化週間とし、取組状況を記録させ、改善方法を探らせる。
サマースクール	○夏季休業を活用して、補充的な学習を中心に希望者を対象に行う。事前に小学校と情報交換を行い有効な活用法を探る。

幼保小中一体教育研究会〔注 14〕	○学習指導部会 「学習の基礎・基本を身に付けるための授業形態・展開の工夫」ノートの取り方、意見発表の仕方など、小学校の取組みを中学校の授業でどのように継続していくかなど意見交換を行う。
三校合同研修会〔注 15〕	○「学び合いの場を取り入れた授業の取組み」について、小中の実践を報告し合う。 ＜実践報告例＞ ・低学年から少しずつグループ活動を取り入れ慣れさせている。 ・みんながわかるためにグループで教え合う活動は有効である。 ・班での活動では多くの気付きや考えが出やすく考えが深まる。 ・率直な意見や感想を出し合うにはペア活動が有効である。 ・教科の特性や単元内容により小集団の人数を変えている。
連携の成果	☆小中共通した内容で情報交換ができた。 ☆教科別協議会で小中の連携について話合いができた。 ☆小学校の指導と、進路指導を踏まえた中学校の指導との違いを相互に知ることができた。 ☆全教師が公開授業をし、互いに参観することで自分の授業を見直すきっかけとなった。

連携の成果にもあるように、情報交換や協議会を重ねることで、小学校・中学校、それぞれで実践されている学習形態や指導方法を知ることができ、双方の教員が自分の授業を見直すきっかけとなっています。そして、授業展開の工夫に取組み、少人数学習による学び合いや学習相談を充実させたことで、児童・生徒の意識を向上させることができました。

中１ギャップ解消のために、小学校の教員の思いや取組みを理解し、中学校でつなげていくことが、重要なのではないでしょうか。

〔注 14〕幼保小中一体教育研究会：児童生徒・学習指導・支援教育・地域参加者部会の４部会からなり、情報交換や実践報告を行い、幼保小中、地域の方との連携を図っている。

〔注 15〕三校合同研修会：H中学校区内の三校（中学校１校・小学校２校）

２　具体的な取組み～中１ギャップ解消を中心に～

（３）　小中連携シートの活用　～行政・専門家との連携～

～南足柄市の実践～

小学校から中学校への滑らかな接続の一つの方法として、「小中連携シート」（66 ページ参照）の活用があります。小学校の支援を中学校に伝え、中学校では入学後の支援の具体策を練ることをねらいとしています。この「小中連携シート」を活用し不登校対策に効果を上げている南足柄市の取組みを紹介します。

取組みの経緯

＜平成 18 年度＞
不登校調査において、中学校で出現率が県の数値（3.87%）を上回る（5.64%）

→

＜平成 19 年度＞
月７日間の欠席調査から月３日間の欠席調査へ変更・導入する

→

＜平成 20 年度＞
専門家の支援を得て、小中連携シートの有効活用による中１不登校対策の取組みを始めた

南足柄市教育委員会の指導の下、「小中連携シート」の活用のねらいについて次のように教職員に周知されました。

- ○最も重要な「予防」を第一の目的と捉える。
- ○支援を必要とする子どもへの対応について、小学校からの的確な情報を「小中連携シート」として発信し、中学校の教師が正しく受信することで、子どもを共通理解し個に対応した支援を行う。
- ○「小中連携シート」を申し送ることで、学校間の指導の継続性を図る。
- ○「小中連携シート」と相談の専門家のアドバイスを各校の教育相談活動に役立てる。

このようなねらいのもと、南足柄市が予算措置をとり、小学校側が提出した「小中連携シート」に、臨床心理士等の専門家が具体的な個別支援に対するアドバイスを記載し、それを小・中学校両方に送り、アドバイスをもとにした児童・生徒理解の深化に活用しています。

各中学校区では、年３回「小中連携シート」を活用した不登校連絡会議（４月の会議は児童指導担当・生徒指導担当・旧６年担任・中１担任で構成）が開催されます。連絡会議の主な内容は、次のようなものです。

【４月】
○中学１年生についての情報交換
○小中連携シートの様式の検討

→

【６月】
○各中学校におけるシート該当者についての協議

→

【２月】
○コメントの検討
○学級編成など受け入れ体制の整備

「小中連携シート」には、具体的にどのような専門家のコメントが書かれているのか、一例を紹介します。

「あなたがいてくれてうれしい」、「あなたがいることでとても助かる」という活躍の場面をつくっていただく必要があるかもしれません。
自分自身もどこかで世話を受けたい気持ちがあり、その裏返しかもしれません。

このコメントからもわかるように、専門家からコメントをいただくことで、具体的な声掛けや支援の方法が示され、中学校生活での活躍の場や居心地のよさを保障することにつながります。「小中連携シート」の活用は、小学校、中学校それぞれにとって次のような効果があります。

【小学校】
○６年担任がシートを書くとき、小１からの様子を振り返ることができる。
○小中連携シートに記載するコメントを児童指導部で検討することで、チームで取り組む意識向上につながる。
→校内体制に対する効果

【中学校】
○シートを見ながら話し合い、今後の方向性を考えることができる。
○専門家のコメントがあることで、具体的な手立てを考えることができる。

このように「小中連携シート」が活用され、小学校の取組みを中学校側がキャッチすることで、入学前から個々の受け入れの準備ができ、これが中１ギャップ解消につながっていくのです。「小中連携シート」という紙ベースがあることで、何度も立ち戻り専門家のコメントを読み返すことができます。「小中連携シート」の記述内容を数多く参考にした学校ほど、不登校が減少しているという結果が出ています。さらに、教師一人ひとりが欠席に敏感になり、本人をめぐる仲間関係に配慮すること等が不登校対策に有効であることが確認されたのです。

以上のような取組みにより、南足柄市における平成22年度の中学校の不登校の出現率は、平成18年度の5.64%から1.94%に大幅に下がったのです。

取扱注意　　シート番号　－

小中連携シート

6年 組	出席番号	在籍校 小学校 / 進学先 中学校

(ふりがな) 氏名	(　　) 性別　男・女	担任氏名

欠席状況 学年欠席日数	1年 日	2年 日	3年 日	4年 日	5年 日	6年12月末 日
遅刻・早退回数	5年 日	6年12月末 日				

遅刻状況　【欠席がみられた理由・きっかけ】

【欠席がみられた理由・きっかけ】
□病気・身体の不調（　　）　□友人との関係の問題　□学業上の問題
□学校環境の変化　□家庭環境の変化　□その他（　　）　□不明

【登校に対する本人の意欲】　□積極的　□どちらともいえない　□消極的　□わからない
【登校に対する保護者の意欲】　□積極的　□どちらともいえない　□消極的　□わからない
【学習への現在の意欲】　□積極的　□どちらともいえない　□消極的　□わからない

【行動や様子】
□まじめ　□おおむね意欲的　□無気力ないし消極的　□集中が持続しない　□指示に従わない
□いつもおとなしい　□いつもにこやか　□楽観的である　□興奮しやすい　□感情の浮き沈みが激しい
□落ち着きがない　□いつもつまらなそうにしている　□他人の評価をとても気にする
□周りの刺激に敏感である　□集団活動ではおどおどする　□嫌なことからは徹底して避けようとする
□怒りをうまく収められない　□何か浮かぶとすぐ言動に表す　□安心できる人（大人・親友）から離れられない
□過度の甘えや依存がある　□相手の気持ちを理解できない　□集団に参加しない　□乱暴な言動がある
□いじめ被害の経験あり　□いじめ加害の経験あり　□校則違反を繰り返す
□心に傷を受けた経験あり（内容：　　）　□虐待の通告をした
□発達上の問題・困難（発達障がい等），その他身体面を含め医療機関から診断を受けているなどの申し出
（具体的に：　　）
□身体・成長について学校で配慮すべきこと（　　）

【その他の登校時の状況】
□保健室によく行く　□相談室によく行く　□別室登校（適応指導教室も含む）
□その他（　　）

【学校生活での様子】

【学習面での様子】好きな教科（　　）苦手な教科（　　）

【学校での好きな活動】

【学校での苦手な活動】

【趣味・興味をもっていること】（例　ピアノが弾ける，サッカーが好き，等）

【家庭環境・生育歴】（分かる範囲で結構です）

【教育相談関係機関等との連携について】
□該当なし　□適応指導教室
□医療機関　□フリースクール等その他（　　）

担任記入欄
【本児に対して行った工夫や配慮・支援】

【中学校に期待する工夫や配慮・支援】

担任以外記入欄
【本児との関わりや気付いたこと】

記入者（□教頭　□旧担任　□学年主任　□養護教諭　□教科担当　□その他の記入者（　　））

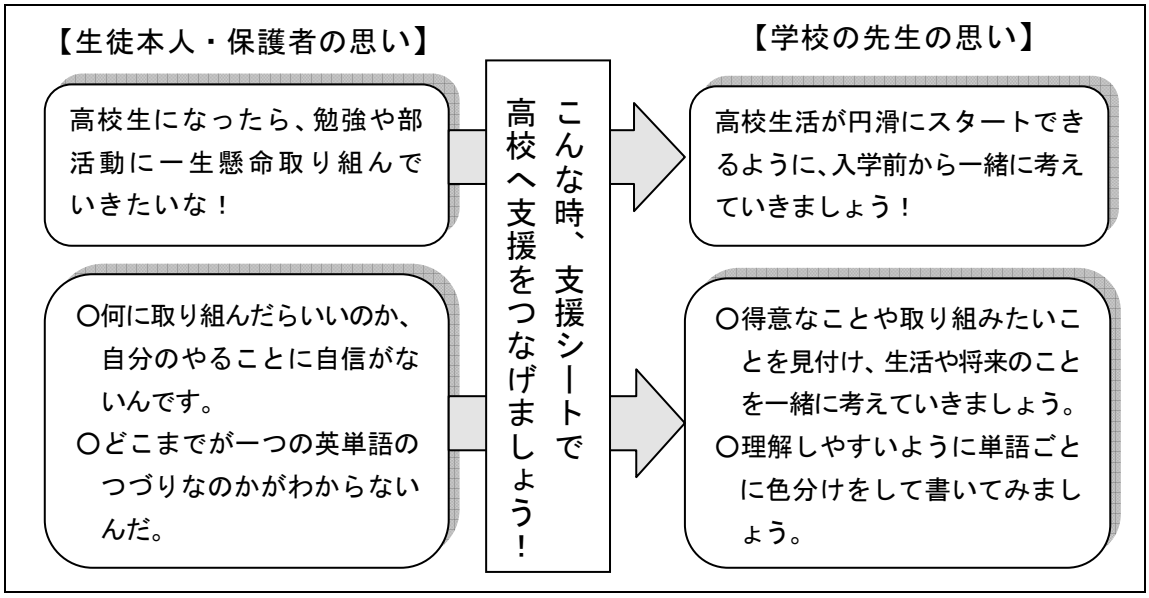
校長名　　印

（４）　中高連携のあり方 ～支援シートの活用～

中学校から高等学校へ進学する際、中学校での不登校などの状況や生徒本人の取組み、保護者の願いなどが必ずしも十分に高等学校に伝わらない現状があります。高等学校は広い範囲から多くの生徒が入学してくるため、入学の時点では一人ひとりの生徒についての理解が十分とは言えません。そうした課題がありますが、支援が必要な生徒にとっては、生徒本人や保護者の理解を得て、必要な情報が適切な形で高等学校に伝わり、高等学校での支援につながることが大切です。

そこで、この課題解決のための方法として、前節で紹介した「小中連携シート」に倣い、神奈川県教育委員会が作成した「支援シート」（68ページ参照）の活用が有効であると考えます。

中学校から高等学校への円滑な支援の継続のため、この「支援シート」を中学校在学中に、生徒本人・保護者と中学校が一緒に作成し、生徒本人・保護者が保管し、高等学校へ伝えます。それを受け、高等学校では生徒本人や保護者の要望も踏まえて、必要な支援の方法を具体的に考えます。



第 15 図　「支援シート」の活用例

「新たな不登校を生まない」ためには、学校種間連携の取組みが効果的であることは明らかです。中高連携による「支援シート」の活用はまだまだごく一部での実践にとどまっていますが、苦しい思いに悩む生徒たちが少しでも希望を持って高校生活を過ごすことができるよう「支援シート」の積極的な活用にチャレンジすべきではないでしょうか。

支援シートⅠ　これまでの支援これからの支援

ふりがな 氏　名	学　校　名	記入日	相談メンバー
（生徒の氏名を記入します）	○○中学校	平成○○年 ○月○日	〔中学校での話し合いのメンバーを記入します。〕
	↓ ◇◇高校	平成◇◇年 ◇月◇日	〔高校での話し合いのメンバーを記入します。〕

＊記入者には○印をつける

	項　目	内　容
これまでの取組	中　学　校	
	家　庭　生　活	
	余暇・地域生活	
	健康･安全･相談	
これまでの取組の振り返り	生　活　面 学　習　面 健　康　面	
	な　ど ＊生徒に応じた項目を記入する	
これからの計画	これからの方針	
	高　等　学　校	
	家　庭　生　活	
	余暇・地域生活 卒業後の生活	
	健康･安全･相談	

「これまでの取組」は…

生徒本人、保護者、中学校の先生等（担任、学年の先生、教育相談コーディネーター、養護教諭、スクールカウンセラー等）必要なメンバーで話し合って、作成します。

担任、教育相談コーディネーター等学校の先生が保護者との相談内容をもとに作成する場合もありますし、生徒本人の「こんなアドバイスが役に立った！」という視点を中心に作成する場合も考えられます。

「これまでの取組」には…

一人ひとりの教育的ニーズに応じた、今後の支援に生かせる情報（県立高校での支援を考えるヒント）を、各項目ごとに記入します。例えば次のようなものがあります。

○今までの有効な支援
- こんな場面で困ったが、支援によって、うまくできたこと

○心配なこと
- 支援を受け努力してきたが、まだうまくいかないこと
- 配慮が必要なこと

○支援に生かせる情報
- 好きなこと、地域での活動、将来の夢等

「これまでの取組の振り返り」は…
- これまでの取組の中で一番成果のあったこと
- 引き続き行うと有効な支援
- 県立高校に入ってからの次のステップ

等を記入します。

「これからの計画」は…

保護者、県立高校の先生等（担任、学年の先生、教育相談コーディネーター、養護教諭、スクールカウンセラー等）必要なメンバーで話し合って作成します。生徒本人や、中学校の先生が参加することもあります。

まず「これからの方針」に、生徒本人を含め、関係者の共通理解のもと、これから３年間で特に大切にしたいことを記入します。

そして、県立高校や、家庭、地域で取り組んでいきたいことや必要な支援など作成時点での基本的な方向性を記入します。

具体的な支援を継続する中で、内容を見直し、修正していきます。関係者が、適切に役割を分担することが必要です。